2．旧陸軍前橋飛行場に関わる遺構と遺物について

（1）対空高射機関銃座

陸軍前橋飛行場の設定は、1943（昭和18）年5月の土地測量から始まった。飛行場敷地は約160町歩に及び、43年から44年にかけて、地元の堤ヶ岡村や国府村をはじめ周辺町村住民による連日の勤労奉仕が続いた。そして44年2月には、いまだ完成していない滑走路に金網を敷いて初めての飛行機が着陸した。前橋飛行場は教育訓練用に設定された、陸軍の飛行場の一つであった。飛行場内外には、飛行機誘導路や掩体（壕）11か所が造られた。

この飛行場に関わる遺構や遺物が発掘調査に伴って検出されている。塚田村東Ⅳ遺跡の11号土坑と引間松葉遺跡Ⅱ区（別途報告）の312号土坑が、対空高射機関銃座であった。また引間松葉遺跡Ⅲ区からは未使用の迫撃砲砲弾が出土した。

塚田村東Ⅳ遺跡の11号土坑は、飛行場の東隅から北へ約220メートルに位置している。発掘当初は、覆土上層から戦後の遺物が出土したこともありゴミ穴と判断されたが、さらに慎重に調査を進めた結果、ゴミ穴ではなくて何らかの土坑であることが判明した。近隣の住民からは、土坑の約20メートル北には東西に飛行機誘導路が延びており、それを挟んで千鳥足状に飛行機の掩体（壕）が存在し、付近に高射機関砲座があった、との証言が得られたこともあり、この土坑は対空機関砲座の可能性が高まった。

そこで防衛研究所図書館での調査となった。担当者一名が同図書館専門官に土坑の図面を見てもらい、飛行場と土坑の位置関係、その他の状況を説明し教示を受けた。それによると「機関砲なら98式高射機関砲」「機関銃なら92式重機関銃」の公算が大きい、との説明を受けた。

ただし98式高射機関砲は全長2m45cmであり、11号土坑は径約2mである。この場合、土坑の外に銃口がはみ出してしまい、旋回補弾操作に支障をきたしてしまう、最低でも全長程度の直径が必要である

という。92式重機関銃の全長は115cm程であり、土坑の中におさまる。また、3か所の付随する張り出し（長さ70～120cm、幅30～70cm）は弾薬格納に使用された可能性があり、銃座の深さは盛り土を除くと70～80cmを必要とすることから、当土坑の深さと一致する。そして土坑の北西に伸びる溝は交通壕と思われ、主要射撃方向は敵機予想進入経路の一つである東側を指向していることもわかった。

これらのことから、塚田村東Ⅳ遺跡11号土坑は92式重機関銃を使用した、対空高射機関銃座であることが判明した。

なお、「太平洋戦争米国海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書」中にある1945年7月10日に行われた前橋飛行場に対する空襲、そのドッグ掃討隊の戦闘報告書に「降下中、飛行場北側にほんのわずかな銃撃を確認したが、たいしたものではなく飛行機にも命中しなかった」とあるが、それに該当する対空高射機関銃座であるのかは判然としない。

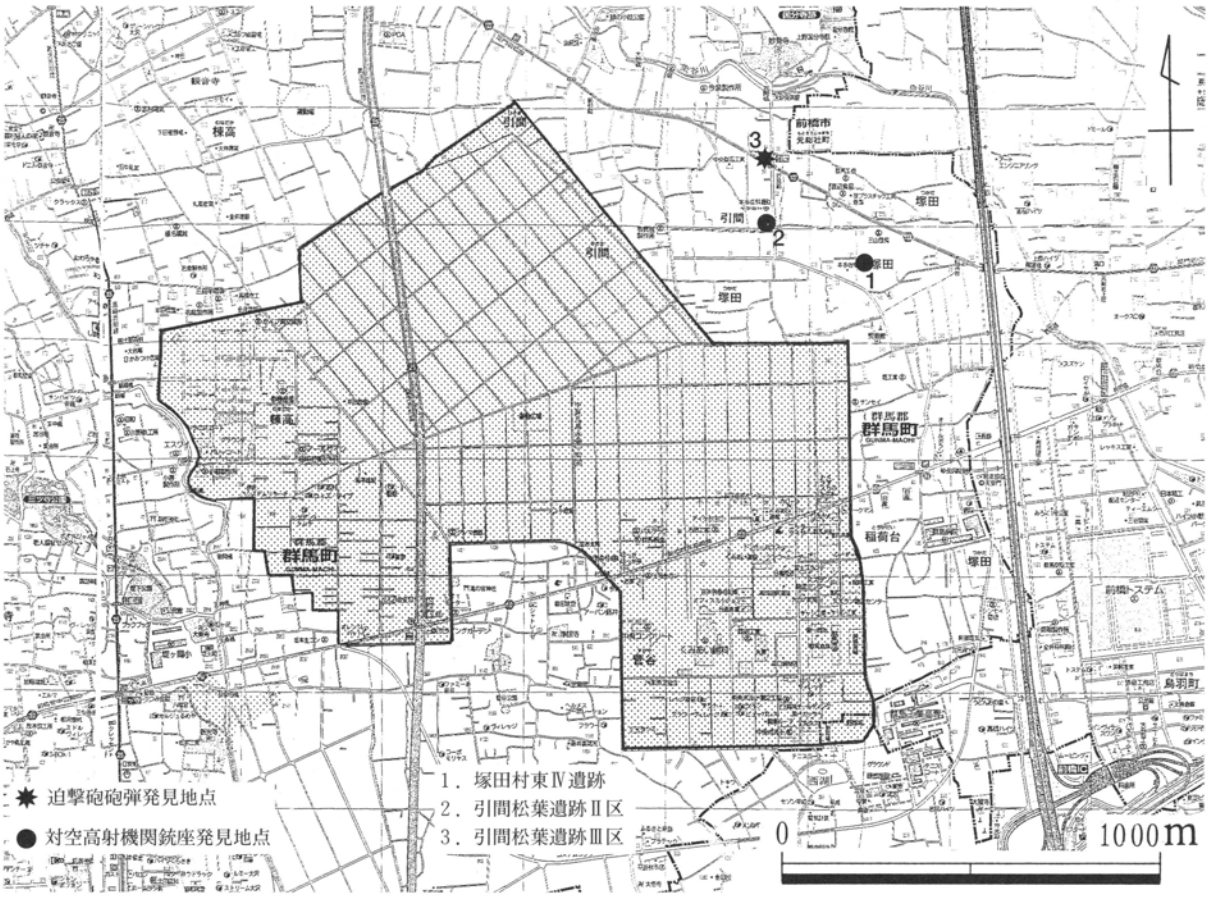
（2）迫撃砲砲弾

2003（平成15）年10月1日、引間松葉遺跡Ⅲ区の調査現場から不発弾と思われる砲弾が発見された。発掘区の松杭を抜こうとしたときに、地表下約15cmのところでスコップに当たったものである。砲弾の長さ30cm、直径9cm、重量約3000gで信管も付着。

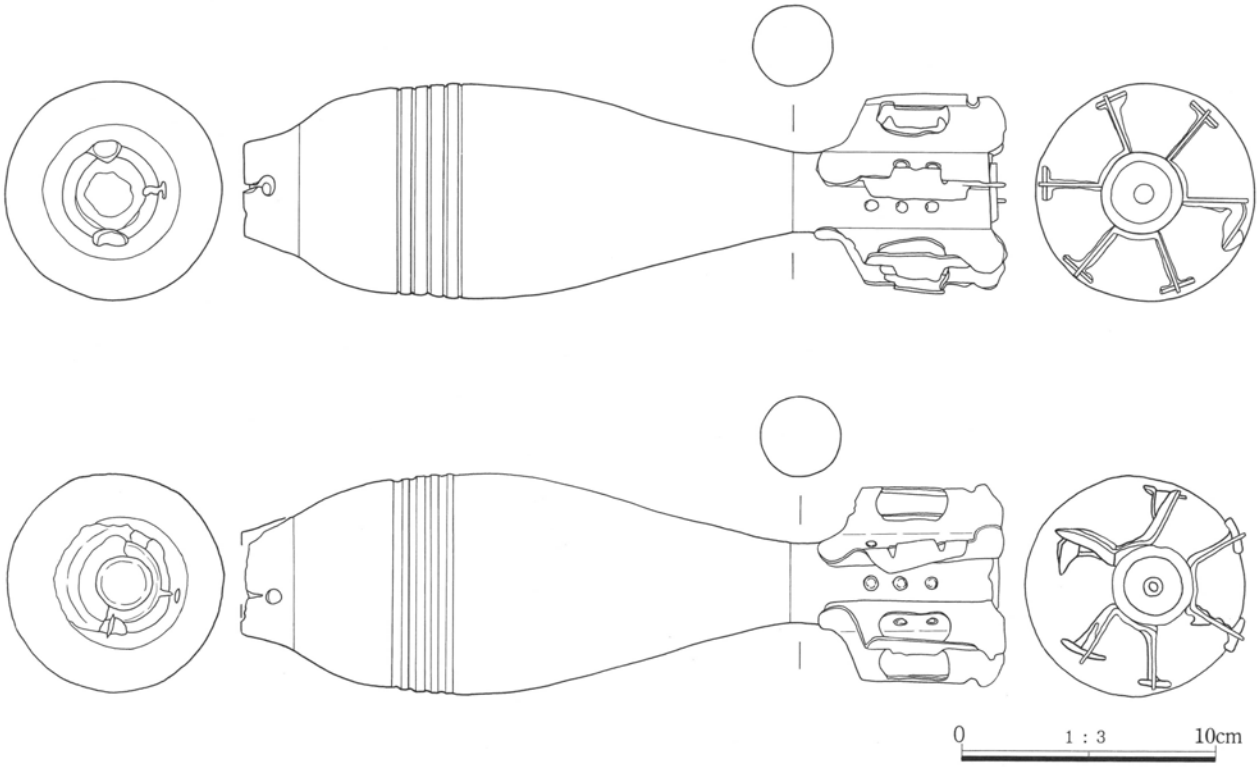
直ちに警察に連絡、県警察本部生活安全部銃器薬物対策課、高崎署員が急行して現場を封鎖し調べたところ、すぐには爆発の危険性はないということであった。砲弾は高崎署で保管し、自衛隊の定期回収の際、引き取ってもらうことになった。

その後、この砲弾は旧陸軍の「九四式・九七式軽迫撃砲」の砲弾であることが判明した。爆発すれば、半径30mに被害が及ぶ。

なお、現物は回収されてしまったので、参考までに県内の赤城演習場跡（陸軍特殊演習場）で採集された同型の砲弾2点を紹介する。戦争遺跡関連の調査では、このような事例は今後も増えるものと思う。その取り扱いには慎重を期したい。



第265図　陸軍前橋飛行場（アミ部分）と関連遺構位置図



第266図　九四式軽迫撃砲砲弾（参考図）

3．総括

今回の塚田村東Ⅳ遺跡・塚田中原遺跡０区・引間松葉遺跡Ⅲ区の発掘調査では、奈良・平安時代を中心として、縄文・古墳・中世・近世・近代に至る､様々な時代の資料を得ることができた。

塚田村東Ⅳ遺跡では、奈良・平安時代の住居跡15軒や多数の遺構を中心として、古墳時代の畠跡、中近世の土坑墓や畠跡、近代の土坑（機関銃座）を検出した。奈良・平安時代の遺物では、住居跡や土坑から羽口や鉄滓が出土し、住居跡の年代から８世紀前半に鉄生産との関わりがあったことが確認された。中世では土坑墓や火葬跡が検出され、また、近世では土坑墓が検出され、17世紀の埋葬例や人骨が確認できた。

塚田中原遺跡０区では、奈良・平安時代の住居跡19軒を中心として、中世の遺構や遺物８世紀前半の住居跡から鉄製錘が出土し、溝跡からは奈良三彩が出土するなど、奈良・平安時代の集落から重要な遺物の出土がみられた。また、中世の土坑墓も確認することができた。

引間松葉遺跡Ⅲ区では、古墳時代後期から11世紀代に至る住居跡が検出され、遺物では、土坑から饒益神寶が出土した。また、近代のガラス製品などがまとまって見つかった。本遺跡からは、調査終了後の埋め戻しなどの撤収作業中に、旧日本軍の迫撃砲砲弾が出土するなど、前例の少ない出来事もあった。

今回の塚田村東Ⅳ遺跡・塚田中原遺跡０区・引間松葉遺跡Ⅲ区の成果を中心として、集落の変遷を述べてみたが、あくまでも部分的な情報から考えてみたに過ぎない。これまでの調査を踏まえ、西毛広域幹線道路の本線部分の発掘調査成果がまとめられることによって、この地域におけるより詳細な集落動態が解明されるであろう。

これまでの調査によって、これほどの良好な資料を得ていながら、それを十分に活かしてまとめられなかったことをお詫びすると共に、調査・整理において、貴重なご意見・ご指導を下さった方々に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

参考文献

井川達雄　2003『元総社西川・塚田中原遺跡－一般県道前橋・足門線バイパス（西毛広域幹線道路）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告323集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

今井和久　2003『稲荷塚道東遺跡－前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第320集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

木津博明・桜岡正信・友廣哲也ほか　1987～1992『上野国分僧寺尼寺中間地域（1）～（8）』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬町誌編纂委員会　1998『群馬町誌』資料編１　原始古代・中世　群馬町誌刊行委員会

群馬町誌編纂委員会　2001『群馬町誌』通史編上　原始古代・中世・近世　群馬町誌刊行委員会

齊藤仁志・吉田聖二　1997『上野国分寺参道遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団

笹澤泰史　2001『元総社西川遺跡－国分寺進入路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第288集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

田辺芳昭・綿貫綾子他　2000『国府南部遺跡群Ⅰ・Ⅱ』群馬町埋蔵文化財調査報告書第55集　群馬町教育委員会

田辺芳昭・綿貫綾子　2001『国府南部遺跡群Ⅲ』群馬町埋蔵文化財調査報告書第59集　群馬町教育委員会

田辺芳昭・綿貫綾子　2002『国府南部遺跡群Ⅳ』群馬町埋蔵文化財調査報告書第62集　群馬町教育委員会

田辺芳昭・綿貫綾子　2003『国府南部遺跡群Ⅴ』群馬町埋蔵文化財調査報告書第64集　群馬町教育委員会